

沖合漁場整備対策調査

森脇晋平・古江幸治・為石起司

1．調査目的

地形的条件により日本海に流入する流れ藻は本海域に集積、滞留し、本海域がそれに付随する多種類の魚類幼稚魚の重要な着底海域となっていると推察される。そこで隠岐海域における流れ藻付随性魚類の育成場整備の可能性について基礎調査を実施する。

2．調査方法

(1) 流れ藻調査

まき網により6月上旬から7月下旬にかけて隠岐周辺海域と浜田沖で流れ藻を採集し、付随性魚類の種組成・体長組成を比較した。浜田沖から隠岐諸島周辺海域における流れ藻の分状況について目視により調査した。

(2) 標本船調査

隠岐島周辺のモジャコまき網着業船に操業場所の記帳を依頼してモジャコの漁場分布を調査した。

(3) 漁場環境調査

調査対象海域の漁場環境(流況、海底地形、底質など)をこれまでに得られている知見を整理した。

3．調査結果

(1) 流れ藻調査

浜田沖と隠岐周辺海域で採集した流れ藻に付随していた17種の魚類を確認できた。産業的に重要な魚種はブリ、メダイ、ウマヅラハギ、カワハギ、クロメジナ、ウスメバルであった。海域毎の出現パターンを明らかにした。

流れ藻目視調査によれば本年の本県沖における流れ藻の分布は5月上旬から下旬からにかけてピークがあるように思われる。

(2) 標本船調査

モジャコまき網標本船の操業位置をみると、今年は操業日数はすくなく、モジャコ漁場は隠岐・島前海域周辺一帯にみられ、北部沿岸域にやや偏っているようにみられる。

(3) 漁場環境調査

衛星画像などの解析による隠岐海峡の流況は渦動流を形成し混合されながら東進していく傾向となる。海洋構造の季節変化をみると6月に表層を覆っていた水塊は7月以降深度を深めて50～75m深にまで達する。日御碕沖から隠岐海峡部の陸棚部の西側では泥質、海峡部では砂質堆積物が卓越している。

4．調査成果

- 調査で得られた結果は、日本海中部沖合漁場調査検討委員会で報告した。
- 沖合水産資源の持続的利用のための漁場整備対策調査に利用された。